



繪入 斬板

赤染朱門後集

入

遠  
1648  
8上



赤染清の續草

八之巻



目録

一

雁小財布の令と重て巻戸の巻

零落の身道とゆと袖の巻

襦袢と志保の巻

似るやうな蔓茶の巻

赤染巻之五

才二 志んは内でのりか親とて電將軍

わらわは刑とて燕大臣おれの嘆息

色ふんハ乱焼懐かろまの穿牙敷

鬼とよ小え抜た戸深の怪

才三 養生は燕は白拍子お女自見

舞子通一ふら高てみる夜装音籠

鉄板ハ霜露とて深根斬のふね

凱陣ハ難波悪魔降伏大佛

一 雁に波布れ念とられて危戸は流

金篇に文とまひたりは漢とい支字おらも物なる流令

にう流ざとそ者襦ゆは文とまめらにむるべとれ備

わ海理と辨へるは流が款んらりお女とよひさ出たて

に大津のせも河に巻て元と実出たれ勤もよん若界十年

空申られ流文に判かて合子部十面文た念と物布に勝

ともせ流まんすとおめてゆり足すでもとんへと忠ひて

案門ハちりつとぞんれ抜た小をりていとくと病もは流

せ流らるるに美屋一おあて居るさつて首もうさ

飛流つとひいあひととどろは是ふありて捨ひと流く

とた橋鉄炮は流もあく板ハ難波は流倒とて排を

いづれも後徳れと年月太ぬふ八百文れはりのと下りるは合と  
ふれゆふ暇びとる栄耀氣に於て抱ておめりも面倒あや  
絨布の細れあまると居れ是ふ結付ゆりあやげ肩にあよい  
とをぬくまよりまた斗はしう何しう志けん件れ為獲  
て結び付る財布とたふ虚空とて飛はとこのこ  
きをわとほびひて飛んもつらさあけさかあつくさうと眠  
んでぢめんだ結ぶる徳意が有りな衣帯は吐しも思  
ひ合せてあうしりりりり不道ふ身と若びう子に似れ記が  
忠義はみ流ハ何とぬ娘若と助えんと極くんと碎けとも  
前後小捕人の意とひあへ返るさるもあく思ひ付てう身  
代え化装は先をきてふ淋と矢の途方にあさくれ居はりか  
明市丸いひてふ極今八十人極あけと八付とれえけ

生死二つハ世に似えんまふ付ま方に流る重業がむうハ  
腹くれ古氏ふあは思ハハ極た中とあうらりたり身も  
あ氣れあひ好まふ迷ハ動極とあひしより鄙人とあて  
習ひ耕一當れ中にも世男子ハその方だれ徳意と  
女が連ありし牌ひてりかま宴れ牌ふあは赤性ハしらと  
教へ候し所人せも被奴めが業何事も運を為せは  
あふよ仁等もに役てあは思てあは思と色にもよりの  
あまれれぬああふく人れあまて角漢とてくはがの糸れ  
無感とさう者ハ家ありのさうしじふあまらるる流りくあまて  
ハあまのきとも色ふ物とハ袖れれ流り末始れ一向とあひあへ  
子娘若落しあは流り利まさんとすつまは彼方へ入るお  
うし公府のあまあや安宗坊又納す押明て娘若も出合がら

たるいふ新しん合てや父と根時同根と衣れ袖小は付給くを  
 時用も打發の空あるも始終根子給に眞心してする  
 世れ改ハ文廻し一同ノ物とままり廻るバ心なとつ口を  
 もあことよ別きてよりあくと徒廻りて是とぞいひれ信  
 赤坂里人の懐小祝はまの心ふけりて世に流るはあえ  
 し書し樂むけきハ憂にもあれ今年は秋とも送り  
 り今宵なれ松間小は備して居るも今宵はれ物恐  
 心身もあらんあきおとりのぞう伊波れ兼盛が恐るゝ心身り  
 波れ又平井兼盛何角れ伏しては内分らと娘とハまぬ知  
 今更流は身とありても流るハ倍性心したまの波念報  
 ふも更と志さばはれの方とみ子にまをさぬいづけは  
 け時用入たが又願にもして娘しく送て一礼三人物とつて出

せハそのあふ新向たとしほれ者うもりまことも我あくとハ氣  
 きひあつしは根と疾と定めると若れ又小波あつて娘をハ御  
 く物と志めぬ今更いへ伊波れ兼盛がうらはれ自と兼人  
 存波れ兼盛根れ波れ心へ舟と心接小はと依りけし波後ら  
 赤れ親との心はさきをぬい法れ場とあす人の情一つとて今も  
 の心りり今更すてまろく居りまうたとうあれ事たあの  
 波れハ一問に眞よりこればは後首捕め志なくとまかかれは  
 者大心小まう樹一人の女を契り依れ妹背もあやめ女  
 と波しりり母と母とこれ海平と姉一方と暗まらうとの  
 浪平は短尺とあつて伊波れ兼盛を名に依り娘ふりまら  
 ありんとすと時用波れは芳志して一合と脚りこれ後後  
 是れなるもあひ誰か人れ親より親心をとも時用波れは



新編... 棟の蓋押... ととゑかま... 娘が音... 九を中... ぶあま... いかん... につて... 兄弟... とも... かく... ね娘と...

... 漢の肉... に似せ... 更な... せび... 一子... さら... 盗人... 若て... 出ひ... 三...

人して才入合とよと狗美用亮めて立所入にきて來されハ軍  
統統小出のひとれがむ首おてそく神有る三もあつづきこ  
と思ふやうな大ていれあさしくわひさうしこまがわさる  
それれに去て見てけうとあつてんまひおちお娘とのびりく  
あて居る所へ依はでれ致誠後あきと何まけた積のふけり軍  
統統小返ついでまおとよと志せてあうと教れま久出たの  
に小安楽は陣かまりつて居るを思ひひげどまこわと向ふ  
統統拍子こあさくはひのまなりま拍子にたうと拍とああなれ  
ちやあられ拍あつて夢とわけあさくあしひさる陣元りの何う  
はんこさあさるま無望するさげさうつてたさなれハ作務の  
ひく統布れ合居れ是小結付ら内と改められハ金もち  
は是小我拾取扱ハ是れかものにつくれあさる所もあさるに多

あつハ人かあつは是統統善徳悪れ理とあつと似れハ加護の  
あつさう作務今も要堂とやあさるハ玉酒のへとあつと  
て合と拍は是ハ拍も作務と兼内小大はハ五城あさる難を救ひ  
し人時用中坊小ハ玉後ハ事なく拍入と何と我作務の  
拍はとあつハは後路りつととほじくはのみ立別あ無  
れ子さ子にあつハ宿世の因縁も郭公のあつとハ裏古ハ頼義  
の居ハ朝の文とま古小ハとつて今あつ居ハ是に結し合とあ  
はつてあつハは難義とあつハも世人居とあつて居合とよハ  
和し

二 巻はらにめでとく親王の電將軍

巢と覆して卵と括むハ鳳凰翔らす胎ありと掣て死とかけ





いとバツて山あんなしおめりしつら内情猛々武士がふも忠  
ふらと絶つるさ海印と八云ト癡者トハつてさ去後小唄  
仁親王と玉に猛威とつらひふん今此重宝と廢して自  
位小即人と要通日くふつりの難くもさうして法家此  
中悪人の妻娘下女白拍子此おひもも眉目容麗しと  
ハ五折のさめて嬌犯しとれと保ひる若にハ忽ち火水は  
わけ一命と断る此人今武烈とあひきてあぢ思れぬ者う  
愛ふ惟茂此妻戸深ハ丈此細とちりて親王にうづよ  
辰々のが形も若界此つとめ法人小の事か若て人の  
六八が親王此親ととりえ一盃此お相の寢すれ御ふと  
も細ちのめんれ奥庭あふとををわると思てせてあつ  
ふけに横帯此り此親とあひきてさうらハ親王とあひ

善小あつて、道行ふも思つて一りと流石のあつたれ  
かん弱く何とぞよに道行ハアふん立まぐくまの物と  
物よやうに後をさうつとまじつあふんつりしとせはく  
あつてもさびくあまはれもふ小後されハ傍り流くお陰通  
例の事てハおまどと分別仕くとの法本集ひて親王  
にうはさささふん七拾余人此愛婦人此月自女とちり  
中にもすぐれてはこつとあつた女にめんあつた甘川軍  
浪逸平あふんつて一人だけ白砂に引は急親王此信ふと  
ひさしれこまの物ふささひてその役く此責及を生所  
とくあつて琉球草とつらせらふ女の後と刻に綱つとつ  
ておまもあつたあつたハ肥田あつた女とハ樹小あつた  
と勝りてこれと射を梅と的と定めて射あつた者にハ加

あし移く此の物とより五分也一ははるははるは刑にけ  
刑といふ六籍とて刑に懲るとかへも大なる大なる布垂  
そのくし油と流しを彼飛人とて是定めて懸つてくは諸  
すまバ忽ちたむき叫び死にけは原妻もめりハを放たせり  
はあしむは女がまを振固麻に可賣も服たせりあは毛よごらて  
をみる親王氷狩とてはや面白中とておてはひ多ひ  
原よひひ女磨ぐらふ後とハ已せともあはれりまもは  
て勝ふあり。舌懸たてまてひと車輪に振あつてんや  
付治人とて原もも會釈してし親王振あつて半ハは  
でもはせり。うまう斗ハを振あつては起てははるは  
て育つてははるはの勝たぬも耳も被るり振あつて  
るア唐といふものう丁と親王振あつては起てははるは

ふりてふとてハ天女つりよれ三日も四月も縁鬼の責苦  
ハ敬重をハ言に事ハ責ふも逢す。はさご振あつてははるは  
る威でやうとて。はてもまでハはれぬ。是ハたはれ持す氣あ  
ハ然ははるは。ふもよ。は第一抱あつてははるは。是ては女の  
あづむ物。後初もは。そりし。い。年す。おふハ物ては  
も。惚れ。初。あひ。み。を。ぬ。り。女。た。そ。の。み。と。情。ひ。と。い。つ。て  
ふ。付。ふ。は。と。り。禁。と。り。あ。ら。う。君。ハ。悪。志。は。古。れ。お。抱。と。や。あ。ら  
う。し。ま。せ。小。所。姫。よ。百。夜。ま。て。あ。ひ。車。れ。も。り。あ。ひ。ん。を。これ。も  
木。お。て。は。れ。ぬ。と。て。い。合。点。が。あり。年。の。あ。ひ。五。は。は。ゆ。つ。ひ  
廻しに親王多りんわ。た。今。と。り。と。ら。う。休。め。と。身。ひ。ん。の  
痛。め。は。あ。る。氣。と。あ。ら。う。守。ハ。麻。呂。に。あ。び。く。ん。を。し。る。あ。よ。月。に。あ。り  
て。元。張。り。傳。ふ。す。り。あ。ら。う。ハ。ね。と。大。事。と。し。ん。張。ハ。は。な。れ。入。ら。う。を。紀



こころに涙は流すもせし思裁くの間危何し心さかた有り  
きせせとどし事さふの地あふはけ身ハ人との心内をさよ  
加んたぢうまをこい方もあつて私しそ屋月小悪と合すす也  
ハ認王とんし腰とぬり。えにたし私しそ屋月小悪と合すす也  
あびそて喉ひささの性小悪とれとあまたハせれ死換磨と  
むごひこ又半あつてハ屋月小悪と合すす也  
半はんが情六さすひしりもあはれ人も指しされ事す  
ゆ板であひくれ勢も震ひ。底てさなうく物代新氣親ハ又た  
づひあな女とあつて大キ小怪ひ事さるらあはれと合すす也  
あはれもあつて押明誘ひ入んとたあを横浪逸平帯し  
押さめ袋の也よぬと研せ中との女ハ竹茂小勝し  
訓保し女ハ寝西れ何しハあつておはれはさし流りて

改めりとのれは流るべしと戸張る懐小舎秋もつくと合すす也  
一物さう懐銀引出しこららじませ是ても石連流りて大集  
ひきて突おし女め白懐小及を原款おれまら者と合すす也  
彼奴小縄を撒屋引しとさるる限モウこれと合すす也  
にけこと色も変はいと多ハ小悪と合すす也  
平板れ皴面を竹茂教小あみあつてハ穉女とも合すす也  
若界とらる身ハ竹茂ハ悪う牡丹解なでも合すす也  
ハあえて居とみもせい花街て教されと合すす也  
ひらけら解もあつと疎ら初もあつて合すす也  
竹茂めと死だめして流してやらつたおハの合すす也  
まひ事とあつと合すす也  
事しとあつと合すす也

思あつ掃流任妹武士に嫁ぐ嘗て刀のりしむり申とて誠を  
思ふまはしといふ振をい付ても通海守を悟サア振たるを  
こ着るのてらる健氣れてい親王怒りけアア女の座をけし遊年  
引きま

三 吉住の飛屋に何白物子とて女目見

後漢書朱浮が傳小達東に承とて自ら身とてささ  
るる懐れとの戒めり也とて物と人とも猪まりの  
思ふ思あり。その思りあふとてうく人と割るに  
鬼仁の親王ハ戸強と驚わつたに鬼と奪られ懐親に  
もゆをに懸と紅明とてつて心おとせひて若出る  
遊年と遠ざけ小六を愛うあする奴まらんせしめふとて

親にむれハ是よりふあはれも思て依り原浩るも  
あつ大ふ小物とあつて西前退後果たも信る空に人小を  
てをさるる色を女といふ娘樂武帯れ事夫人と懸し  
し七拾余人に結女も戸強一人に籠み引きてし風歌え  
て又君り戸強ハと親善小別をしまた事のとて思れり  
何年引請とていあんと振くしと碎けを海さる  
身あは力あつてあさううその思ひれ余りうつりく  
て瘦海に掛親王事事に思ひ戸強うんとあつさるん  
結くれ取下の白物子と毎日奇藝つくとてさあその  
後集といふ大津系れ名付者戸強う氣よ入て日毎に  
柳子曲太鼓か福天拍れ狂言とて思に思く思あつ  
今日ハあつとて挨拶りうふつらに門扉もを報れ

ていひの小座に入参り御子うら御ちり小乘に御子御  
 つる大御子に祝のつらううら御ちり小乘に御子御  
 一に今あつひ小御子御ちり小乘に御子御  
 てて目足之れ間小御子御ちり小乘に御子御  
 してて目足之れ間小御子御ちり小乘に御子御  
 しく御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 女にひたす御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 せ八軍武歩退く御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 してて目足之れ間小御子御ちり小乘に御子御  
 しく御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御

けちを御子御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 へやうや御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 葛藤よくして大小着こみひたす御ちり小乘に御子御  
 ひ入して御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 切に御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 足と御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 ハ御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 ハ御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 ら御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御  
 ら御ちり小乘に御子御ちり小乘に御子御

昔ハじり今ハ無人小志さふ佳女神奈小ハ教されどを  
 ちる教育して酒がこて親王様おしりぐ痛まするり  
 といつてと海せんとい傍小をよれど戸強はこお方厚くはま  
 ひ右もたも歌中と海ありありもれり時も梅六千  
 日此身もたつたにめしつていあつたありハ教しりごと梅者  
 合神事乃奈いきて接教ハおおも今ハ先ハ道は同く  
 懐叙接て一度にららとサをきハ鬼仁かいらたむき  
 さ海にめんハ利統より膝下にならと引つて増さ女東が振  
 音くを酒小さるる碎外より祈ふんを巧れとことたれを月  
 減とつる極奈落一才同教と白状といかたひ之とハ背  
 骨とらら油油であふて云せてんん之雷れ振あり智と  
 黄白もよ物も物小あてて半は魚遊思ハ居る圓と満

出振りつてころを刀美向に會親もあつ切付くと後意ありと親王  
 ハ角眼ふらりてん教さ眼付給ハ泡吹ぬ蝶よ眼きりり  
 流んれ兼登入祈もすくとまきくと身ともしおつ白ゆれ  
 ありりさひあつ矢先親王れ袖板小共と射さるとあらり  
 捨アおくと老磨に又向ふと歌者ハ志ぬとと座ととた  
 まハ今然り入あつ大袂示袂袂といひハ茨花流常身流  
 藤者もら刀とんて大物し中前れ面ととの海流く共  
 奥小才と圓り太靴去袖子サ鳴しつと柳子れ曲とすめて  
 殿と小礼を入携ハ親王ハ事大信給と原後と女東た太  
 小技のけ檻より出はつていへ柳子顔と片よについで  
 引返あハあひもあね惟茂朝長綿れと重さも死あ  
 小由三儀徳と立と海を振鬼仁らるるア末徳と惟茂海



死よりと世に傾り移りては、  
 花は先小を候とて、も身に  
 補し物ありを蓋し骨とせむ  
 一命と助け候とて、いふ  
 二も悪く候とて、  
 一も悪く候とて、  
 と好まず何とて、  
 夫れ極とて、  
 夫にも款たんとて、  
 てよの人と魂すまふとて、  
 と害とて、  
 あぐ忠勝負とて、

海をきハ親まとも思つて、  
 赤姓あり海に候とて、  
 一々用れ候言のりあり、  
 庭とに花ありとて、  
 親王とて、  
 赤白ひくけ合れ、  
 八百射する矢先、  
 て味方にあり、  
 兵甲とて、  
 孫とて、  
 ハ滝月ふらり、  
 長衣候とて、

此安否と約ひて候いと云ふに親王本遂に強ちてハ  
いへども凡そ人あつた竹杖園生惟茂おのり申ひ難し事  
ハ綿命に候て戸なりと鬼仁親王と亀栗おのりので崩落  
此儀武吉のと乱さるるに沖所ある所ありて武吉  
切し格くやあまれえ涙が負さるるもど傾城よ海の上の妹  
花のりみら持色香に憑じ草本ゆく榮あつてと云ふ  
目出たき事

寶曆四年

甲戌正月在辰



